S. Ashina

＜前回＞オリエンテーション
Ａ．キリスト教思想研究入門――キリスト思想史、古代から中世・宗教改革
Ｂ．目的　　Ｃ．内容
Ｄ．確認事項：受講者には、一回の研究発表が求められる（キリスト教学学部生には原則的に発表が求められる。ほかの者はレポートに代えることも可能)。

＜宗教と文化＞
１．なぜ思想史なのか、キリスト教思想史の意義
・宗教現象を見る二つの視点
　1)外から、客観的データの分析に基づいて　→　現代宗教学
　2)内から、内から発信され表現されたものを手掛かりに内面へと迫る。
・生き方を決めているポリシーの問題（思考方法、発想法、見方）としての思想。
・思想は、個人の発明である前に共同体の共有の思考方法である。
　生きられた思想と語られた思想
　両者の循環構造の成立する場としての「われ／われわれ」
　　→　共同体／正典／信仰告白（正統と異端）
・思想の歴史性　→　思想史的アプローチの必要性
　伝統（テキストの影響史・受容史、地平融合）→理解
　「聖書的伝統としてのキリスト教」（水垣渉）
２．ティリッヒの文化の神学における思想史の位置づけ　　cf. 波多野宗教哲学
・宗教と文化→意味の形而上学（意味論）
　意味世界（意味システム）としての文化と、意味システムの根拠付けとしての宗教
　意味根拠の歴史性　cf. ハイデッガーの存在史
・宗教学：本質・経験・規範
　　→　循環構造（宗教は、本質概念、経験概念、規範概念の三重構造を有する）
　　cf. トレルチのキリスト教概念の分析
　1)宗教の原理論（宗教哲学）
　2)宗教の思想史（宗教史／宗教類型論）
　3)宗教の体系論（神学・組織神学）
３．文化は宗教の表現形式であり、宗教は文化の内実である（ティリッヒ)。
　↓
　西欧近代の国民文学は、キリスト教との密接な関わりにおいて論じ得る。宗教は文化の母体である。
４．近代の基本原理としての自律性・自由。
　近代文化（特に、啓蒙主義的近代）は宗教的基盤からの解放を目指した。
　↓
　西欧近代の国民文学は、宗教的基盤からの分離において、それ自体として論じ得る。
５．思想研究の前提的知としての思想史
　思想と思想史（哲学と哲学史、組織神学とキリスト教思想史）とは循環関係にある。
　　ティリッヒでもバルトでも。キリスト教史の古代～宗教改革は、聖書学とともに、キリスト教研究の前提に属する。

１．キリスト教の成立と初期キリスト教
Ａ．イエスの宗教運動

（１）神の国
１．新約聖書学→仮説・蓋然性における結論（伝承史を逆に辿る）
　主要な資料：新約聖書の諸文書　→　新約学の研究領域
　　＋

隣接分野：同時代のユダヤ教研究
ヘレニズム文化史・宗教史
正典外資料（グノーシス主義諸文書）

２．イエスの福音
①「時は満ち、神の国は近付いた。悔い改めて福音を信じなさい。」（マルコ 1:15）
②「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」（マルコ 10:24b ～ 25）

３．「神の国」の宣教
国（バシレイア）：神の制定した新しい秩序（支配）　cf:国家機構
↓　王国
新しい契約の実現

４．神の秩序←→この世の秩序（古い秩序）＝罪（ハマルティア）
階層性・二分法・対立　的はずれ　cf:規則の侵害
関係の歪み（神関係、自己関係、他者関係）

５．神の秩序の実現＝古い秩序の転換＝罪の解決＝救済　→　福音
↓　「山上の説教」（マタイ５～７）
イエスの運動：教え・論争・癒し（奇跡・しるし）、共同生活（共食＝開かれた食卓）

（２）終末論と知恵

６．終末論の類型
・ユダヤ的な終末論→キリスト教へ：イエス＝ダビデの子孫、人の子のようなメシア
預言者的：ダビデの子孫からメシアが誕生し､ユダヤ民族を政治的宗教的に解放する。
黙示的：終わりの時（「その日」）に、人の子が神より派遣され、悪を打ち破り解放をもたらす。
しかし、イエスの宗教運動では、ユダヤ的な終末論の意味転換がなされている。
「義人の王国」から「罪が招かれる神の食卓」
「心の貧しい人々は､幸いである､／天の国はその人たちのものである。」（マタイ 5.3）
「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。」（マタイ 9.12）

７．知恵の教師イエス
８．慣習的知恵（既存の秩序を肯定）、転換的知恵（既存の秩序の転換・批判）
９．知恵から終末論へ：人間性の回復される現実をもたらす知恵

＜参考文献＞

１．ブルトマン　『イエス』未来社。
２．荒井献　『イエスとその時代』岩波新書。
３．田川建三　『イエスという男』三一書房。
４．青野太潮　『最初期キリスト教思想の軌跡――イエス・パウロ・その後』新教出版社。
５．クロッサン　『イエス――あるユダヤ人貧農の革命的生涯』新教出版社。
６．ボーグ　『イエス・ルネサンス――現代アメリカのイエス研究』教文館。
７．大木英夫　『終末論』紀伊國屋新書。
８．芦名定道・小原克博　『キリスト教と現代――終末思想の歴史的展開』世界思想社。

Ｂ．初期キリスト教とパウロの世界伝道

（１）問題設定・背景――初期キリスト教あるいは原始キリスト教

１．イエスの宗教運動からキリスト教会の形成まで
２．新約聖書の記述の歴史性
・新約聖書はキリスト教共同体の文書であることをどのように考えるか。

ブルトマン：キリスト教神学はイエスからではなく初期キリスト教団のケリュグマ（宣教）より始まる。

・キリスト教会は単一か？　単線的に展開したのか？

パウロ書簡に見られる対立・論争が示唆すること。

「イエス　→　新約聖書諸文書（とくに福音書）とキリスト教会の成立」

３．「本書においては「原始キリスト教」という偏見のない名称が選ばれる。原始キリスト教の境界線はどこに引かれるか、と問われねばならない」（コンツェルマン『原始キリスト教史』日本基督教団出版局、22頁）、「教会があるいは少なくとも重要な神学的思想家が、使徒時代という理念を作り上げ、それによって自分自身をこの時代から区別することにより、伝統に対して自らの関係を新しく規定する点において明らかな変化が示される。この自意識によれば、境界線はおよそ紀元一〇〇年頃に引くことができる。もちろん、その変化は固定的なものではない。」（23 頁）

「原始キリスト教は統一体ではないのである。」（23 頁）

４．諸文書の成立年代と様々な仮説

・使徒会議(48/49)とユダヤ戦争(66-70)

・文書の最終形態と断片の年代遡及　　・二資料仮説とＱ仮説

（２）諸問題

５．難問

・イエスの宗教運動と初期キリスト教の関係。復活と聖霊降臨の出来事は何であったのか。

・パウロ書簡の正典編入の意味

「ユダヤ教／初期キリスト教／ヘレニズム」の三者関係における、パウロ的キリスト教の生成過程の問題。異邦人伝道（使徒会議）とユダヤ戦争は、初期キリスト教にとって何だったのか。

６．イエスの宗教運動あるいは初期キリスト教の多様性

単線的な歴史像は後の再構成である。

・エルサレムとガリラヤ

マルコ福音書の弟子批判：「マルコとしてはまさにペテロを中心とする十二弟子の権威を批判することを目的として福音書を書いているのである。」（田川、29 頁）

・ヘブライオイとヘレニスタイ

荒井「エルサレム教団におけるいわゆる「ヘブライオイ」と「ヘレニスタイ」の問題をめぐって――使徒行伝６章１－６節に関する教会史的考察」

「エルサレム教団には当初から思想的に相異なる二つのグループが存在していた。第一のグループは、ユダヤ教の伝統に拠って福音を理解し、ユダヤ主義に傾く宣教活動を行っていた。」(66-67)

・マック「この初期の時代から、イエスの追従者たちの五つの異なるグループ」

「語録福音書Ｑ」を生み出した「Ｑの共同体」／マルコ以前の宣教物語を生み出した「イエス派」／「トマス福音書」を生み出した「真の弟子たち」／マルコ以前の奇跡物語のセットを著した「イスラエルの会衆」／「エルサレムの柱たち」（『誰が新約聖書を書いたのか』青土社、74頁）

７．パウロ書簡の正典化の意味

・異邦人伝道から世界宗教へ

・世俗的共同体への配慮あるいは共存

ヘレニズム・ユダヤ教を背景とした、ローマ市民パウロの存在意義。

↓

ローマ帝国の全体に及ぶ大規模迫害以前の歴史的状況において、ユダヤ教から自らを差異化しはじめたキリスト教会の行った選択？　（あるいは、この選択を行ったグループのみが存続可能であったのか？　しかも、かなり微妙なタイミングであった、70

年のエルサレム神殿崩壊から 95 年頃のドミティアヌス帝のキリスト教迫害の間）

８．ユダヤ教と初期キリスト教

ユダヤ戦争以降の状況が初期キリスト教とユダヤ教の分離・対立を引き起こした。

ヨハネ文書（教団）の歴史的背景。

「ヨハネ福音書におけるキリスト教とラビ的・ファイサイ的ユダヤ教は、対立する両極を示すと同時に、一つの共通の宗教的伝統から生起した事実に、初期キリスト教の形成とユダヤ教の密接な繋がりがあるのである。」（土戸、240 頁）

９．初期キリスト論成立の問題

「われわれの問うべき問いはこうである。われわれは、イエスの死と復活という教会設立の原事件から、使徒会議以後のパウロの宣教の発展に至るまで、二十年足らずほどの間に起こった神の子キリスト論の展開を仮説的に再構成したいのであるが､その場合に、モザイクを繋ぎ合わせるかのようにして集められたこのユダヤ教資料が、どの程度まで助けになるか、という問いである。」（ヘンゲル、69 頁）

10．キリスト教はいつキリスト教になったのか？　キリスト教とは何か？

イエス／パウロ／パウロ以後

（３）パウロ――迫害者から使徒へ

30 頃:エルサレム教会の成立　66:ローマの大火事、皇帝ネロのキリスト教迫害

66-70:第一次ユダヤ戦争（132-135:第二次）

11．西洋的キリスト教会の神学的基盤としてのパウロ

パウロへの反発・パウロ批判、体制的イデオロギーの代表

12．新しいパウロ解釈（パウロ･ルネサンス）：1980 年代以降

体制派パウロから戦うパウロへ、政治哲学におけるパウロへの注目

「パウロの神学の社会革命をひき起こす潜在力を秘めていた」「ユダヤ人と異邦人の一体化」（サンダース、24）、「レーニン主義者パウロ」「アウトカーストの共同体」「無制約的な普遍主義への関係にもとづいて形成された戦う共同体」（ジジェク『操り人形と小人』青土社、195）

13．パウロの思想的背景：ヘレニズム・ユダヤ教と都市

様々な思想的な文脈が交差している。ギリシア語訳聖書の存在。

14．迫害者から異邦人への使徒への回心（復活のキリストとの出会い）

↓

地中海世界の伝道旅行、都市から都市へ伝道、キリスト教急速な拡大（点から点へ）

15．エルサレム教会・ユダヤ的キリスト教（ユダヤ教イエス派）

とヘレニズム的キリスト教

律法遵守は救済の条件か、救われるためにはユダヤ人になる必要があるか。

しかし、特殊的な形なしに普遍は現実化できるのか。

＜聖書テキスト＞

・「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」（ガラテヤ 3:28）

・「異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を務めているからです。」（ローマ 15:16）

・「16 わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。17　福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。18　不義によって真理の働きを妨げる人間のあら

ゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。19　なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。」（ローマ１）
・「6　わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。7 死んだ者は、罪から解放されています。8 わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。・・・10 キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11　このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。」（ローマ 6）
・「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。」（２コリント 4:16）
・「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」（２コリント 5:17）

＜参考文献＞
０．波多野精一『基督教の起源』（1908年）岩波文庫。
１．F.F.ブルース『イエスについての聖書外資料』教文館。
３．Ｈ・コンツェルマン『原始キリスト教史』日本基督教団出版局。
４．バートン・Ｌ・マック『失われた福音書――Ｑ資料と新しいイエス像』青土社。
５．田川建三『原始キリスト教史の一断面』勁草書房。
６．荒井献『原始キリスト教とグノーシス主義』岩波書店。
７．土戸清『ヨハネ福音書研究』創文社。
８．E.P.サンダース『パウロ』教文館。
９．マルティン・ヘンゲル『神の子――キリスト教成立の過程』山本書店。
11．佐竹明『使徒パウロ―伝道にかけた生涯（新版）』NHK ブックス。
12．荒井献編『パウロをどうとらえるか』新教出版社。
13．アラン・バディユ『聖パウロ――普遍主義の基礎』河出書房新社。
14．ジョルジョ・アガンベン『残りの時――パウロ講義』岩波書店。

Ｃ．パウロ以降のキリスト教とユダヤ教

土屋博『教典になった宗教』北海道大学出版会、2002年。

（1）ユダヤ教とそのキリスト教に対する関係性

１．古代イスラエル宗教からユダヤ教への歴史的展開
　バビロン捕囚以後：唯一神教への純化（宗教改革）、正典編集とその文書化
　　ディアスポラ（神殿からシナゴーグへ）
２．唯一神教への純化と新たな思想展開：知恵文学と黙示文学
『マカバイ記』「黙示的終末論」
「紀元前二世紀に起こったマカバイの反乱の時期以降」（大林、59）
「国家全体としての苦難ではなく、信仰ゆえにふりかかる個人の苦難、死は、従って殉教死」「復活思想は、信仰のために死んでいった、義なるものに対する報いの必要性から生まれてきた」、「善なるものが残虐にも抹殺されていった。その死を犬死にさせまいとする、当時の同胞のいたわりから、個人の復活という黙示的信仰が広がっていったのである」（大林、60）、「義憤」（62）
３．ヘブライ語聖書のギリシャ語訳（LXX）
　BC. 3 世紀のアレクサンドリアのユダヤ人共同体、70 人の長老の派遣。
　パウロが読み引用した聖書は何か？
Timothy Michael Law, *When God Spoke Greek. The Septuagint and the Making of the Christian*

Bible, Oxford University Press, 2013.

（２）ユダヤ教の知恵文学の展開とキリスト教

４.『知恵の書』『シラ書（集会の書）』
５．創造思想の展開と知恵の人格化
６．知者の系譜と教父思想　→ キリスト教の基本教理の形成
７．クムラン問題　→　クムランを素材とした歴史小説。cf. 邪馬台国問題、

（３）フィロン

８．キリスト教への多層的・多面的な影響
　聖書とギリシャ哲学との関連づけというキリスト教教父の課題の先駆者
９．フィロンのロゴス論
「フィロンのロゴス論の真の意図は、伝統的なヘブライ的神観から、神と世界、啓示と理性、信仰と哲学との二つの異質的原理が、なんらの第三者的中間者を媒介し、あるいはまた直接的に連続することなく、それぞれ絶対的断絶性を保持しつつ、しかも相互に関係しうる原理を確立することであったとみるべきであろう」（平石、285）。
10.『世界の創造』の「二段階創造論」
　第一創造物語→可知的人間（人間のイデア）／第二創造物語→可感的人間（土の塵）
　　神の像
　↓
キリスト教におけるプラトニズムの受容、聖書のアレゴリカルな解釈の影響。
　アウグスティヌスによる創世記注解

（４）キリスト教にとってユダヤ教とは何か

11. ヘレニズム世界という環境の中におけるキリスト教の母体
　　ヘレニズム世界への土着化に関しても、そのモデルになる
12. キリスト教がいつからキリスト教に、いかなる意味でキリスト教になったかを理解する上で不可欠の参照点。キリスト教の聖書的伝統からの逸脱に対する批判のための外部視点を提供する。キリスト教の逸脱形態には、旧約聖書否定論がしばしば伴う。
13. きわめて近い存在であり、同時に不幸な歴史。
　キリスト教がパウロ主義を採用したことの意味。

＜参考文献＞

１．M・ノート『イスラエル史』日本基督教団出版局。
２．荒井章三・森田雄三郎『ユダヤ思想』大阪書籍。
３．山我哲雄『聖書時代史旧約編』岩波現代文庫。
４．石田友雄『ユダヤ教史』山川出版社。
５．市川裕『ユダヤ教の歴史』山川出版社。
６．秦剛平『乗っ取られた聖書』京都大学出版会。
７．秦剛平訳『七十人訳ギリシャ語聖書』全５分冊、河出書房新社。
８．ヨセフス（秦剛平訳）『ユダヤ戦記』全７巻、『ユダヤ古代誌』全20巻、『アピオーンへの反論』、『自伝』山本書店。
９．H.L.フェルマン、秦剛平編『ヨセフス論集』山本書店。
10. 平石善司『フィロン研究』創文社。
11. グッドイナフ『アレクサンドリアのフィロン入門』教文館。
12. フィロン『世界の創造』教文館。
13. 土岐健治『初期ユダヤ教研究』新教出版社。
14. 大林浩『死と永遠の生命――そのキリスト教的理解の歴史的背景』ヨルダン社。